

石巻市内で活動している社会福祉法人のご紹介

第7回インタビュー

社会福祉法人輝宝福祉会

平成28年4月から改正社会福祉法により、社会福祉法人による「地域における公益的な取組（社会貢献事業）」の実施が法人の責務として位置づけられました。

この取組は、次の3つの要件をすべて満たすことが必要となります。

- (1) 社会福祉事業または公益事業を行うに当たって提供される「福祉サービス」であること
- (2) 「日常生活又は社会生活上の支援を必要とする者」に対する福祉サービスであること
- (3) 無料または低額な料金で提供されること

具体例としては

- ・ 夏祭り等、イベントの開催による住民間のつながりの再構築
- ・ 働き手が少ない商店街との連携による就労支援
- ・ 公共交通機関がない地域での移動支援や買い物送迎支援
- ・ 災害支援ネットワークによる避難所支援
- ・ 刑余者の自立支援に向けた自立準備ホームの登録

などが挙げられます。

石巻市内にはたくさんの社会福祉法人がありますので、実際にどんな社会貢献事業に取り組んでいるのか、順番にご紹介していきたいと思います。

今回は「社会福祉法人輝宝福祉会」さんをご紹介します。

インタビューにお答えくださった方は、理事長の小野崎秀通さんと副施設長の武川裕子さんです。

社会福祉法人輝宝福祉会

- 法人所在地 石巻市蛇田字沖13番地
- 電話番号 0225-90-4990
- ウェブサイト <http://www.kihofukushikai.com/>
- 設立年月日 平成24年12月28日
- 事業 保育所
- 施設・事業所 石巻ひがし保育園、石巻たから保育園
- 社会貢献事業



(1) 笑顔あふれる地域交流

夏祭りに秋祭り、運動会など、地域の方にお越しいただき、交流を図っています。幼児期に自然と触れ合う機会を大事にしており、海や山での園外保育や、花祭りなどの文化伝承のための行事においても地域の方のご協力をいただきながら実施しています。現在は、コロナ禍により2年間も住民との交流機会を作ることができていませんが、一日でも早く収束することを願い、これからも地域の皆さんと共に笑顔あふれる地域づくりを続けていきます。

(2) 実習生の受け入れ

子どもの感性を育てるには、保育士の感性も大事であり、実習生にも同じことが言え、未来を担う人材育成に繋がる実習指導を心がけています。昨年、本園で実習を行った学生が今年入社しました。実習経験や学校での授業を活かし、本園で活躍をしています。

(3) 災害時における地域の緊急避難施設

大震災を経験した住民からのご意見を反映し、保育施設は災害に強く、地域の緊急避難施設としても活用できるよう建設しました。

子どもたちの安全は最優先ですが、地域住民の安全確保も考慮し、地域と共に災害時の安全対策に取り組んでいます。

—今回は保育また子育て支援を担う社会福祉法人として、輝宝（きほう）福祉会さんのご紹介です。社会貢献事業について、お聞かせ願います。

小野崎：震災当時、渡波には市の保育所が2か所ありましたが、どちらも津波で再起不能となってしまいました。震災後には渡波祝田にあるお寺「洞源院」に地域の子どもたちが避難していた経緯もあり、石巻市へ保育所設立について相談したところ、「失った保育所を建て替えるには6～7年かかる」と言われました。そのため、地域の方々から「和尚さん（小野崎理事長）、土地があるなら保育所を設立してはどうですか？」という声がありましたので、石巻市へ設立のお願いし、社会福祉法人の設立を行い、平成24年12月28日に社会福祉法人「輝宝（きほう）福祉会」として認可を受け、平成25年4月、渡波に「ひがし保育園」を開園することができました。蛇田にある「たから保育園」は、令和3年の春で5年目となります。

私たちは基本的には成長の過程で、人間にとって一番大事な感性を育てる教育をしています。知性は必ずその後身についていくものですが、感性が育たないと知性も歪んできてしまいます。人間の脳はだいたい10歳までに備わり、知性は20歳くらいまでに前頭葉が発達していきます。きちんと体を動かしたり、脳を育てたりするということは、手足を育てるということに繋がってくるため、体

づくりのために「リズム体操」という取り組みを全園児で行っております。

また、私たちの園では、できるだけ自然の中で常に土に触れさせる保育を心がけています。園庭には築山を作って自然の感覚を身につけさせたり、山や川に行ったり、たけのこ狩りなどをしたりしており、子どもたちには自然と触れ合うことの大切さが育ってくればと思います。



年長児による縄跳び編みの様子

武川：年長児になると自分たちで縄跳びを編んだり、園庭にあるこいのぼりも作成したりしています。3～4歳は無理なく模倣という段階で、年長児の動作やしぐさをまねして覚えています。子ども達の性格から特徴まで把握してしっかり6歳児まで成長を見守っていきたくないと常に思います。

小野崎：例年運動会や夏祭り、秋祭りなどの園行事開催時には地域の方々に声をかけ、お越しただいておりましたが、コロナ禍により2年程実施できず、住民さんとの交流の場の機会がありませんでした。その他に公民館活動で敬老のつどいでの歌の披露や、年長児の作品展示など行っていたため、1日でも早く以前の

ように地域の方々と交流の場の機会があれば良いなと思っております。



右が理事長小野崎秀通さん、中央が副施設長武川裕子さん（インタビュー時の様子）

——感性の話が出ましたが、そうすると保育士の感性も大事になってきますよね。

小野崎：そうですね。保育士の勉強会を行っていますが、私達の保育は「さくらさくらんぼ保育」の齋藤公子先生（※1）の保育を推奨し、自然を大事にするという保育をしています。このような保育のグループが宮城県内には少ないのです。全国北海道から沖縄までの保育園で実践されており、この辺では「ひがし保育園」と「たから保育園」を含めて県内6か所です。そのグループで勉強会を行っています。東北でも部会があるのですが、今はコロナの影響でなかなか集まることができないため、オンラインで会議を実施しています。保育士も一生懸命勉強しており、当園の武川副施設長はさくら保育園で勉強を積み重ねてきたこともある経験者です。私たちはしっかり勉強をして0から成長していく過程をしっかり積み重ねていくことを心がけております。

年長児は自然に正座するという意識を持っているので、常に正座をして待っています。そうするとリズム体操でも取り入れている成果もあり、正座をする習慣が身に付いて、30～40分でも正座をして待っていられます。あと絵本の読み聞かせも毎日行っていますが、読み聞かせをすると、想像力をいっぱいかき立てられますからね。当園では絵を描かせますが、一切文字は教えていません。その代わりに子ども自身の感性、感情、いろいろな経験をしたこと、体験したこと、面白かったこと、楽しかったこと、それから絵本に出てくる空想の世界などを絵で表現させています。今どのような気持ちで絵を書いているのかという読み取りを保育士の方でしていかなければいけないのです。常日頃から集中力が大事なので、園児が絵を描くとき、最初は、顔を描くときに目については丸が閉じるまで描けて、2歳になると丸に目がついてくる。3歳になるにつれて手足が描けるようになり、4歳になると胴体が描けて、足まで描けるようになります。絵を描くことで、子どもたちには集中できるような力がだんだん養っていきます。

その他にはとにかく自然に出て、山に行き木登りや色んな虫を捕まえたり、川に行けばカニを捕まえたりします。年中児の部屋には虫かごがありまして、自分たちで虫を捕まえて、命の大切さを感じてもらい、子どもたちが成長していく様子が感じ取れます。

——輝宝福社会さんのウェブサイトを見つけたところ、地域の緊急避難施設になり得ることが書いてあったのですが、その辺をお聞かせください。

小野崎：蛇田の「たから保育園」は、沿岸部から離れているため、災害時はこの場所にみなさんが避難すると思いますが、渡波の「ひがし保育園」の場合は、津波浸水区域なので、2階にみなさんが避難できるようにしております。渡波には震災前に「はまなす保育園」、「渡波保育園」と2か所ありましたが、どちらも甚大な被害に遭い、閉園になりました。「はまなす保育園」は渡波の長浜海岸の側にあったため、壊滅してしまいました。たまたま父兄の中に消防士の方がいまして、震災前に防災のことについて父兄と話し合いをした際に、「この園には2階がありますが、震災時にもし津波がきたら、園長さん方はどうしますか？」ということと言われ、震災時は2階に避難させるということになりましたが、「どんなに大きい津波がくるのか分からない」、「その時はすぐ渡波小学校に避難することにしましょう」という話になり、事前に話し合いをしていたため、震災時はすぐ避難行動を取りましたが、渡波小学校まで逃げ切れず、途中の渡波公民館に避難して助かりました。

「ひがし保育園」では床上1メートルの被害でしたので、今後については2階であればみなさんに避難できるということにしました。それから「ひがし保育園」

の向かい側に避難棟が建ちましたので、一時的には避難棟に逃れて、津波が引いた時に保育園に戻ればと思っております。



「石巻たから保育園」の全景

——こちらの園では保育士や、短大生の実習の受け入れはありますか。

小野崎：もちろん受け入れております。今年はまだ受け入れてないのですが、東北福祉大学卒業の方が昨年実習をし、今年度入職しております。「ひがし保育園」では石巻市専修大学の学生さんが実習に来るなど受入体制はあります。

武川：保育士も園児と一緒に成長していくので、年長児がしっかりやると、周りの子も「〇〇ちゃんのようにになりたい！」と憧れを持つようになります。そうすると自分でも一生懸命やるようになるため、またグッと成長します。一人一人、体操など体を動かしてもらったりすると、できなくても自信に満ちて体を動かしているので、園児たちもみんなの前で認められるのが嬉しく思い、その光景がとても微笑ましく、私たち保育士の喜びでもあります。



リズム体操」の様子

——子どもたちが楽しいということは、それだけ幸せなことですよ。現代は生活困窮や虐待問題もあるのですが、その問題について思うことなどございますか。

武川：大人の世界の中に子どもが入り込んでしまっているケースが多いです。子どもの世界をどうやって作ってあげるか、大人同士が何気ない世間話を子どもがじーっと聞いていることがありますよね。そうすると知らなくても大人の世界の情報が子どもの頭の中に入ってくるんです。そうすると子ども自身が子どもの世界を作れなくなってしまい、言葉はすごい巧みに話すようになりますが、行動と伴わない、中身が育たない状態になってしまいます。できるだけ気をつけてもらいたいことは、親同士が話をするとき子どもが側で聞いていないか確認する必要があることだと思います。職員もすごく気をつけなければいけないんですが、子どもは子どもの世界を作るという「子ども時代」を作らせることが大事だと感じま

す。また、日本人は謙虚なので「お宅のお子さんすごく素敵ね～」なんて言われたときに「そんなことないわよ～」と返してしまうと、子どもは「自分はやらない子ども」と否定されたという捉え方をしてしまうケースもあります。大人が子どもを差別するような不用意な発言などは特に気をつけていただきたいですね。当園でも、園児が職員の話をして聞いていたりすることもあるので、普段の生活の中で、職員同士の会話では気をつけるように心がけております。お父さんとお母さんが会話をしているところに子どもが居合わせた場合、子どもに合わせて話をしなければいけないのですが、夫婦間の会話をされるとひどいかなと思います。そのようなことを保護者の方にも今後伝えられる機会があればと思っています。

——石巻市の法人担当課へ、毎年現況報告書を提出するのですが、担当課から、「地域における広域的な取り組みというところの欄が、どの法人さんも入っていないんです。」という話がありましたので、みなさんが率先して入れられるような取り組みがあれば是非記載していただければと思います

武川：コロナ前であれば、渡波のお寺（洞源院）へ園児みんなで行って、縄跳び編みを指導や、檀家さん方に手を貸していただきながら、お寺で焚火をしたりと声をかけてお手伝いしていただいていたの

で、そういったことが地域交流に繋がると思います。

小野崎：地域の方々に運動会の案内などをして、子どもたちの日頃の成果を見ていただきたいものですが、コロナの感染拡大防止の観点から、実施できない状況であります。園行事である「花祭り」も、保護者2名までと来場者の人数制限を設けております。1日でも早くコロナの収束を願い、また地域の方々と交流をしながら、子どもたちを見守っていきたいです。



※1. さくらさくらんぼ保育 齊藤公子先生

子どもの身体機能と精神の健やかな育ちを目指す「全面発達の保育」を心がけながら、子どもの心と生きる力を育てる事に尽力された人物。

—インタビューを終えて—

東日本大震災により石巻地域でも甚大な被害が多い中、理事長の小野崎さんは、地域の方々や子どもたちのことを考え、いち早く法人設立及び保育園事業をスタートさせたこと、また、地域の緊急避難

施設についてもきちんと考えて話し合い子どもたちの未来や生きる希望を与える環境づくりに尽力を図られているという想いを話している姿が印象的でした。

コロナ禍でなかなか地域交流もできない状況にありますが、当会でも社会福祉法人と連携をしながら、地域や子どもたちが安心して暮らせる町づくりを目指す手助けを一緒に築いていけたらと思います。